

誰しも雨乞山が思われる。古くは雨請嶺とも云われている。全国に雨乞山は多い、近郷では三隅、美東町にもある。雨乞儀礼は前述したように数多くあるが大別して一、水神を祀る（怒らす）。二、山上で千把焚きのような火祭り。三、鉦や太鼓・舞いによるもののようなものである。雨乞山には九州彦山権現を勧請した豊前坊があり（日置町内に豊前坊が十七ヶ所あり）慈雨を得る為に千把焚（乾燥した草木を束した物を千把）によって天を焦がし鉦や太鼓を打ち鳴らし続けたとも思われる。炎によって大気を動かし雷神を鉦や太鼓によって目覚めさせ願いを通じさせようとしたのである。願いが届くや否や知らず物理的には誠に理にかなった儀礼である。尤も山の名称からして彦山権現の勧請以前から雨乞儀礼が行われていたと考えられる。所を転じて、美東町を訪れる。山は高くはないが晴天の日は頂上より九州豊後が見渡せると云う。往古彦山系の修験僧がこの地に滞留し漢学を始め学問の手解き等をなし、かたや

呪術を用いたようである。早魃の年は山頂まで一人二把以上背負いて登り神主の祝詞と共に松明に火をつけその周囲を老若男女が太鼓打ちに合せて唄い踊ると云うのである。その狙いは勿論慈雨を乞うことではあるが修験僧が死の間際に豊後の見ゆるところに葬りてもらえば、当地の早魃は雨乞行事によって天恵の雨を降らせてあげると言ったことによる。と伝えられている。話を戻し日置では千挺洗いは特筆すべきものであるが、他に経塚山（畑下）では昔比の近所に正光院と云う寺院があつて早魃の折には比寺の経を書写し経塚山に納め雨乞祈願すれば願いが届けられると伝えられている。堀田貴布弥神社の祭神は「宇比地邇神」又は「泥土煮尊」とも云う、この神はイザナキ・イザナミ以前の神で泥土や水に関する神でつまり国土を創造し守つた神である（日本書紀）。従つて、雨乞神事には常に係りがあつた。又、日置の地名の由来説もあるように日置氏の存在である。大和朝廷が中央集権政治を行つ

た頃、この地方を統治した日置氏、古代豪族である（帰化人の系譜との説もある）。戸籍を掌る等の為政者の役と同時に司雨的性格を持ち日神祭祀に係つていたようである。普遍的に雨乞儀礼が行われたのは前述のように天明寛政（一七八一〜一八〇一年）の頃、彦山権現の勧請による豊前坊の出現であろう。これは千把焚が主であつて、集落ごとに各人が数把の松明を携えて豊前坊の諸山に登り一斉に点火して祈願するのである。再び近郷を見ると下関市吉見に竜王山（六一四m）と云う山がある。往古雨を司るといふ八大竜王の神霊を奉斎したのである。竜王は竜神（蛇神）であり、湖沼や清水の流れる溪谷に棲むものであつて高い山頂に馴染めないと思われるが峰には必ず水溜りの小池があつて、竜王神の棲み家となつていと云う。竜王山は雨乞山と同意語と考えてよいのではないか。人は食を求めて狩猟や木の実など追い続けた生活から稲を知り安住の地を得た。然し、そこには自然との特に水と

の戦いが生じたのである。あらゆる生活術の知識が生れ又、恐れをいだき、神を奉ることによつて安泰の日々を求めたのである。従つてそこには原始的な宗教観が生じたのは当然の成り行きであろう。天の陰陽に神を感じ、海を見て海神を感じ、高い山稜に神を宿し、自然の中に多くの神々を見たのである。特に農耕民族と云われる日本人は自然の恵み総てを神とみなして来た。近代の科学万能社会は

このような思想を拒否していないか改めて思うのである。恰も今年巳の年である。巳は竜に通じるもので、今一度祖先の知恵を見直してみても如何であらうか。

※今回を以つてこのシリーズは終りと致します。ご愛読有難うございました。※イラストは黄波戸口、山崎美夏さんの作品です。

執筆 岡藤 正作

